

時代の第一歌集『赤光』では「おひろ」との離別後、途方に暮れ、いつのまにか浅草の丹塗りの堂へと足を運んだと詠んでいる。その後、長崎医学専門学校時代でも、欧州留学時にも、浅草の歌を詠んでいる。欧州留学時に肌身離さず持参した観世音の御守護は、浅草寺のであると思われる。その後、欧州帰国の途次に青山脳病院焼失の一報が入り、青山脳病院の再建と、青山脳病院院長への就任という、茂吉の人生にとって筆舌に尽くし難い艱難辛苦の時期を迎える。精神病医として、病者の逃走、自殺、暴力に悩まされ、その重責が茂吉の双肩にかかったのである。日記には神々への崇拜ではなく、観音力にも崇拜し自らの護持を願う汎神論的な世界観がうかがえる。茂吉には宿命に忍従しようとする不安ながら逞しい勇気と、救済を信ずる寂しく敬虔な気持ちとが交錯するのである。

一九五二(昭和二七)年三月に、茂吉が浅草寺に参詣した写真がある。雑踏の中、観音堂に向かい、長男の茂太に後ろを抱きかかえながら、身体が麻痺しているので隻手で合掌している。祈りの刹那のこの写真は、茂吉の純粋な信仰の人の姿である。

戦後地域社会における皇族崇敬の検討

茂木謙之介

本発表の目的は戦後期の皇族崇敬について、特定の皇族と直接縁故のある地域における顕彰運動とその言説メカニズムを分析することにある。

近代日本の天皇崇敬をめぐる先行論はその構造を(天皇―国

民)の二極で理解し、その間に介在する皇族の位置づけは不明確である。歴史学研究における近代皇族研究では軍事史・政治史に偏重しており、文化史的考察が十分に為されていない。またこれら二つの研究潮流が共に全国レベルでの考察に留まっておらず、地域社会レベルでの検討の必要がある。

本発表では一九四六年一月の所謂天皇の「人間宣言」以降の時代状況における皇族崇敬の存続可能性について考察を試みた。対象としては現在も埼玉県秩父地方において秩父宮雍仁親王(一九〇二―一九五三)の崇敬活動を行っている秩父宮会について発足の経緯と初期活動の分析を設定した。分析に当たっては同会所蔵の文書を使用した。

まず秩父宮会の成立過程について考察を行った。同会は一九五三年一月の秩父宮の葬儀に参加した秩父市長・市議会議長・町村会長ら所謂地元の有力者を中心とした発起人らが、秩父宮の分霊を地元の秩父神社へ合祀することを目指して会の原型をつくり、そこに地域の自治体関係者・経済団体・文化団体・企業を糾合していった。其の中では予算面や人的な面において地方自治体が強力にコミットメントしており、活動内容を具体化していく過程に於いては秩父宮にまつわる施設の維持管理などといった直接的な皇族顕彰を行おうとする言説と、秩父宮を顕彰する集団の形成を契機として地域振興とも接続する言説とが混在していることが確認された。また、全国レベルの秩父宮顕彰の会として当時発足していた財団法人秩父宮記念会とは連携をとりつつも大同団結を目指した記念会との距離も確認され、そこからは両会の間にある目的の差異の可能性が指摘出来た。

続いて秩父宮会の初期活動について一九五三年に行われた顕彰事業と秩父神社への分祀運動の二つに分けて分析を試みた。同年の顕彰事業としては秩父宮家からの下賜品配布や秩父宮文庫の設置、植樹活動、秩父宮の五十日祭・百日祭への参加、山岳連盟中心の胸像作成への参画等が挙げられるが、本発表では下賜品配布と文庫設置について考察した。

秩父宮の葬儀の際参列者たちに下賜された菓子は、秩父宮会によって複製量産され秩父郡市の全世帯に配布された。下賜されたモノを分かつことによって秩父宮と地域との関係性を語る言説が確認されたが、その実行に当たっては地方自治体の戸籍調査等のシステムを使用しての頒布が行われた。

次に秩父宮文庫設置について考察を試みた処、国会図書館運営委員長から秩父宮会宛てに文庫設置要請が為される史料が確認されたが、この書き手は秩父宮会の顧問も兼ねており、様々の政治主体の相互関係の中で設置運動が行われていたことが指摘できる。この史料では他に昭和天皇の成婚記念事業を行った図書館の事例を引いて、その成功がたたられており、まさに地域振興の文脈を前景化させる意見も看取された。

そして一九五三年十月前後から具体化する秩父宮祭神化の展開についても検討を行った。秩父宮会が発足当初から行ってきた宮家への分霊の要請が十一月に許可され、秩父神社への合祀過程が見て取れたが、更なる検討を要するものであり、今後の課題としたい。

以上、秩父宮会の初期活動は地方自治体の首長らを中心とする皇族崇敬運動であり、特徴として皇族の神社合祀による神格

化と、その顕彰活動と地域振興の密接性が挙げられた。戦後の天皇崇敬が後景化する時代状況の中での皇族崇敬を同時代における選択的な崇敬の可能性として位置付けることができた。

近代中国仏教における末法思想と亡国論の関係について

エリック・シッケタンツ

中国仏教研究において、清朝にいたると、仏教が究極的な衰退または墮落の状態に陥ったとされている。しかし、仏教の墮落が主張される一方、仏教の当時の社会に対する絶大な影響力も認められている。これは、清末の中国仏教が墮落していたという発想を批判的に問う余地があることを示す。

現代の研究者のみならず、清末期や中華民国期の多くの中国人仏教者も仏教を墮落したものと見ていた。彼らは、「末法」概念を使用して、仏教の現状を嘆いていた。ただ、このような末法意識の存在自体は驚くべきことではない。仏教の最終的な墮落という発想は従来から仏教思想の基礎的な構成部分である。なお、清末の仏教者たちに表現された戒律弛緩、弟子が師匠に従わない問題、僧侶の俗化などの嘆き、これらは仏教現状批判の決まり文句だともいえる。東アジアでは末法概念が仏教の改革と新しい思想の誕生の刺激となっており、仏教の墮落を主張する末法概念は現状の客観的確認より、内部から仏教の改革をうながす思想的措置である。

しかし、清末・民国期に唱えられた末法思想と仏教墮落の言説にはこの従来の末法思想と異なる側面があった。当時の末法思想は中国が滅んでしまうという危機に直面しているという亡